

【一】

問一 a 範囲 b 絶対 c 推測 d 荒廃 e 衰退

問二(1) 万能ではない人間の意志よりも自然という他者の動きを重視し、ときを「待つ」ということによってつくられてきたということ。

問二(2) 人々の動きを理解しながら、ちょうどよいタイミングがくるのを待って、働きかけていくことによってつくられてきたということ。

問三 自然という他者の動きと、人間の労働や暮らしが結ばれなくなり、忙しいばかりで働く豊かさを感ぜられない労働の世界、自然の動きを尊重しない経済社会、信頼感のない人間関係を生み出す世界に変わったということ。

問四(1) 人間の側から見たときの時間の感覚。

問四(2) 森の時間

屋久杉の側から見たときの百年が一単位である時間の感覚。

問五 人間が労働のなかでの自然との結びつきを取り戻し、自然という他者の時間を尊重し、近代以降の歴史が退けようとした「待つ」という感覚を回復することが大切である。

【二】

問一 遠くの山々に咲く花は残雪かと思え

問二 過去や未来のことなどを思いつづけなさって

問三 捕虜となり現在でさえどうしようもないじめな状況なのに、この上、子どもまであったら悲惨の極みであるとして、子どもがないことにせめてもの救いを見出したから。

問四 西行は再び越えることができるとは思っていなかったさやの中山を今こつして越えることができるのも、生きながらえていたからのことだと詠じているのに対して、重衡は同じさやの中山にさしかかった時、捕らわれの身でこのまま鎌倉に行ったならば、もはや生きながらえることはできようもなく、再びこの山を越えて帰京できるとは思われないので、いつそう悲しみを増して、

問五 袂が涙でさらにひどくぬれた。